修士論文（要旨）
2017 年 7 月

対面式タンデムと E タンデムを用いた実践活動の考察
―日本語学習者と中国語学習者のケース・スタディ―

指導　　宮副ウォン裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3907
楊　旗

Master's Thesis(Abstract)
July 2017

An Investigation of Activities Using Face-To-Face Tandem Learning and eTandem Learning: A Case Study of Japanese and Chinese Learners

Qi　Yang
215J3907
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F.Oberlin University
Thesis supervisor: Prof.Yuko Miyazoe-Wong

目次

第 1 章　はじめに 1
1.1 研究背景 1
1.2 研究目的 2
第 2 章　先行研究 3
2.1 タンデム学習の定義 3
2.2 協働学習の定義 5
2.3 タンデム学習の現状 6
2.4 タンデム学習を用いた実践研究 6
第 3 章　予備調査 8
3.1 調査概要 8
3.2 タンデム学習の実践 8
3.3 調査結果 9
3.4 実践タンデム学習への示唆 11
第 4 章　実践タンデム学習（本調査） 12
4.1 参加者 13
4.2 活動内容と手順 14
4.3 調査方法 15
第 5 章　データの分析 17
5.1 分析方法 17
5.2 アンケートの分析結果 20
5.2.1 タンデム学習への評価 22
5.2.2 参加者の学び 33
5.2.3 対面式タンデムと E タンデムの改善点 35

5.3 インタビューの分析結果 37
第 6 章　考察 45
6.1 参加者の学び 45
6.1.1 言語的学び 45
6.1.2 タンデム学習の学び 45
6.1.3 学習ストラテジーの学び 45
6.1.4 社会的な学び 46
6.2 活動評価 46
6.3 対面式タンデム学習と E タンデム学習について 48
6.4 総合的考察 48
第 7 章　まとめと今後の課題 51
参考文献 II
資料 ..... - 1 -

要旨

今日の世界では、国、地域の境界を越えて、人、モノ、情報などが大量、かつ迅速に移動し、さまざまな面で世界の統合が起きている。この現象はグローバル化と呼ばれ、変化している世界、地域社会はグローバル社会と呼ばれている（當作 2014）。また、青木（2016）によると、インターネットとモバイル・テクノロジーの爆発的普及は、物理的な距離に関わりなく、人と人とのつながりを可能にした。教育のグローバル化が推進され、高等教育機関に在籍する学生の国境を越えた移動も大幅に増加している。グローバル化の影響で、日本へ留学する学生が増えている。しかし同時に、日本の大学に在籍する留学生と日本人学生が対話をする機会が少ないことも問題になっている。佐藤ら（2011）は「留学生はしばしば留学生だけでかたまっているので、日本人が話しかける機会も少ないし、また緊張したり、恥ずかしかったりして話しかける勇気がもてなかったりする」（p.149）という日本人大学生のコメントを紹介している。留学生と日本人とのコミュニケーションの機会が増えない理由は、留学生が異文化コミュニケーション力を十分に身につけていないからだと推測できる。せっかく留学しても、実際に日本人と日本語で接する機会が少ないと、コミュニケーション能力が容易には身につかない。

一方、日本国内の大学で外国語を学習している日本人学生には、外国語に慣れ親しむ環境が少ない。楊・李（2012）によると、日本で中国語を学習する場では、「実践できるリアルな言語環境が欠けている」（p.83）という。周りに留学生がいる国際化が進んだ大学では、留学生がその母国語を生かし、日本人外国語学習者とお互いに学びあう言語環境を活用できることが望ましい。大学内において留学生と外国語を学習している日本人学生が、学び合いながら異文化交流できる機会を作り出すことが求められているのである。本研究では、このようなニーズへの回答として、両者の第二言語の実際使用場面を増やす、タンデム学習を提案する。稿者は大学院 1 年の時、第二言語学習支援研究に興味を抱き、タンデム学習の研究を始めた。タンデムは次のように定義されている。

> タンデム（Tandem）とは二人乗りの自転車を意味するが、言語教育・学習の分野においては、母語や熟達言語の異なる 2 人が、ペアで互いの言語学習を手助けするシステムを言う。
>
> 山本(2013:54)

> E タンデム（eTandem）とは、母語の異なる 2 人がペアになり、インターネットを介して、互いの言語や文化を学び合うという学習形態のことである。
>
> 脇坂(2013:1)

タンデム学習について、小林（2016）は日本国内におけるタンデム学習の現状を概観し、その意義と新たな可能性を考察した。先行事例の中には、タンデム学習の原則である互恵性と学習者オートノミーに沿っていない授業実践が見られたものの、E タンデムが外国語の授業環境をスタンダードに変えることができることが明らかになっている。しかし、対面式タンデムと E タンデムの両方を併用した学習活動についてその過程を分析・考察し、成果を批判的に論じた研究の蓄積は現在のところ非常に少ない。

本論文は、対面式タンデムと E タンデムの両方を援用した学習活動（ワークショップ）の分析

と考察である。研究課題は、1）参加者はどのような学びを得たか、2）参加者は活動に対しどのような評価をしたか、3）対面式タンデムと E タンデムの改善点は何か、の三点である。参加者は､対面式タンデムとEタンデムに参加した日本語学習者3名と中国語学習者3名のペアである。

本論文で得られた主な結論は以下の通りである。

1） 予備調査のタンデム活動実践における効果や問題点を明らかにした。

2） 学習者の学びは「言語的学び」「タンデム学習方法の学び」「学習ストラテジーの学び」「社会的な学び」という 4 種類の学びが明らかになった。

3） 学習評価では、1）タンデム学習には有用性があり、高い満足度が得られていること 2）学習時間および頻度に多様な評価が出たこと。3）全員（6 人）がコーディネーターの役割に高い評価をしたこと。4）タンデム学習の利点と弱点が明らかになった。

4） 改善点として、「時間設定」「素材」「E タンデムの種類変更」「フィードバック」という 4 つを挙げ、提案をした。

本研究で残された問題点はタンデム学習と教室内の学習において学習者の心理状態の違いについては解明することができなかった。この点を、今後の実践研究の課題としたい。

参考文献

青木直子（2016）「21 世紀の言語教育：拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」『カナダ日本語教育振興会』17, 1-22.

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門：創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房.

大谷尚（2011）「SCAT：Steps for Coding and Theorization－明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法－」『感性工学』10(3), 155-160.

オックスフォード, レベッカ, L.著/宍戸通庸、伴紀子訳（1994）『言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社.

小林浩明（2016）「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』14 号、pp.135-145.

佐藤勢紀子・末松和子・曽根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子（2011）「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設－留学生クラスと合同による多文化理解教育の試み－」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』6, 143-156.

當作靖彦（2014）「グローバル人材育成のために―社会と教育の果たすべき責任とは」西山教行・平畑奈美編『グローバル人材再考：言語と教育から日本の国際化を考える』くろしお出版, 20-47.

永見昌紀（2005）「協働学習を理解する」『文化と歴史の中の学習と学習者』西口光一（編）凡人社, 80-99.

西野藍（2005）「教室での学習者の母語使用を理解する」『文化と歴史の中の学習と学習者』西口光一（編）凡人社, 102-120.

林良子・杉原早紀 （2013）「スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンデム授業の実践」『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』41, 44-54.

宮下博幸（2016）「＜共同研究論文＞ドイツ語と日本語のタンデム学習の試み－成果と今後の課題－」『言語教育研究センター研究年報』19, 141-150.

宮副ウォン裕子（2015）「ヴァーチャル映画討論会の言語の社会化」『言語教育研究』5, 1-12.

山本冴里（2013）「山口大学多言語化プロジェクトの現状と課題－Language Exchange プログラム≪Tandem≫を中心に」『大学教育』10, 56-66.

楊光俊・李貞愛（2012）「中国語」『OBIRIN TODAY －教育の現場から－』12, 79-84.

吉村弓子・宮副ウォン裕子（2009）「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批判交換－異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割－」『北海道言語文化研究』7, 29-40.

脇坂真彩子（2013）「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」 『阪大日本語研究』25, 105-135.

脇坂真彩子（2012）「対面式ダンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス：日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, 75-101.

脇坂真彩子（2016）「日本とドイツの大学生による E タンデムーインターネットを介した学習者同士の学び合いー」『ことばと文字：国際化時代の日本語と文字を考える』6, 88-97.